

2列王記 13 章 14-19 節 「矢を射る騎兵」

1A 定められた死期

2A 従順なしの尊敬

3A 不徹底な戦い

1B 勝利の願望

2B 中間の放棄

本文

列王記第二 13 章を開いてください、14-19 節を読みます。午後には 11 章から 13 章まで一節ずつ読んでいきますが、今朝は 13 章 14-19 節に注目します。

14 エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んだ。15 エリシャが王に、「弓と矢を取りなさい。」と言ったので、彼は弓と矢をエリシャのところに持って行った。16 彼はイスラエルの王に、「弓に手をかけなさい。」と言ったので、彼は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上にのせて、17 「東側の窓をあけなさい。」と言ったので、彼がそれをあけると、エリシャはさらに言った。「矢を射なさい。」彼が矢を射ると、エリシャは言った。「主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。」18 ついでエリシャは、「矢を取りなさい。」と言った。彼が取ると、エリシャはイスラエルの王に、「それで地面を打ちなさい。」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。19 神の人は彼に向かい怒って言った。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになる。」

ついにエリシャが死期を迎えます。この時のイスラエルの王はヨアシュです。ヨアシュの父はエホヤダで、エホヤダの父はエフーです。エフーが神に用いられて北イスラエルのアハブ家を滅ぼし、バアル信仰を取り除きました。けれども、ヤロブアムの犯していた罪、金の子牛を拝むという罪からは離れませんでした。それで主は四代目までエフーの家が王座に着くと約束されました。ヨアシュはその三代目です。

1A 定められた死期

エリシャは、人々に命と恵みを与えた、驚くべき神の預言者でした。天に昇ろうとしているエリヤに対して、「あなたの霊の二倍の分け前をください」と願って、その願いが聞かれて、エリシャは数々の奇蹟を行なってきました。その多くが、人々の苦しみや死に対して慰めと癒しを与える、恵みと命の奇蹟でした。シュネムの女に男の子を与え、そしてその子が死んだのを生き返らせました。アラムの将軍ナアマンのらい病を治しました。アラムが攻めてきたり、町を包囲したりするのをエリ

シャは救い出しました。エリシャは、奇蹟を行なうことについては、旧約聖書ではモーセに次ぐ、いやモーセ以上の預言者であったかもしれません。

けれども、エリシャは自分自身の命に対してこの賜物を用いることはできなかつたし、また用いようとしなかつたでしょう。神が、この地上に生きている時に受ける苦しみに対して慰めを与えるための奇蹟は行なわれることと、各人の人生に定めておられる死とは全く別のことだからです。

罪を犯したアダムに対して、主が語られました。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。(創世 3:19)」そしてこの定めが全人類に広がりました(ローマ 5:12)。そこで、ヘブル 9章 27 節には、「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている(ヘブル 9:27)」とあります。人には死が定まっているのです。

したがって、この原則を忘れて、この原則に逆らって生きることは神の御心に反することです。私たちの回りにある哲学で誤っているものはたくさんありますが、その一つが「積極的思考」あるいは「プラス思考」という考えです。この考えは、次のように教えます。「問題を解決しようとするときに、積極的な前向きな心構えで取り組むのと、消極的な後ろ向きな心構えで取り組むのでは、結果が大きく違ってきます。」否定的に聞こえるもの、消極的に見えることを一切排除しようとする傾向、あたかも否定的なもの、消極的なものが全て悪であるかのような考えはむしろそのほうが悪い考えであり、時にサタンによって吹き込まれた思想でもあります。

エリシャと同じように臨終を迎えようとしている、姉妹の話をします。チャック・スミスの母親です。彼女は腎臓に癌が出来て、その腫瘍のために激痛が走りました。息子のチャックは見るに耐えられなくなり、「主よ、その病を私に置く代わりに、彼女を癒してください。」と祈りました。すると主がはっきりと、「いいえ、わたしは既に病をこの身に背負った。」と言われました。その時から腎臓が機能し始め、大量の体液が輩出さえ、その大きな腫瘍が消失しました。痛みはなくなったのです！

けれども、彼女は祈りに来る牧師たちの祈りに同意しなかつたそうです。この病を治して下さるよう祈るのですが、チャックの母親は、牧師が部屋を立ち去ると、ほほえみながらチャックに話すのだそうです。「私は彼らの祈りに同意しなかつたの。私は主と共に天国に行きたいから。」彼女は分かっていたのです。死という定めが神によって与えられているのだから、それを快く受け入れたという強い願いがあつたのです。チャックは神の御心が成るように祈り始め、そうしたら彼女は昏睡状態に陥り、間もなくして主が彼女を天に引き入れられました。痛みを取り除くという慰めの奇蹟を主は与えてくださいました。けれども、主が彼女を取り去ることは、彼女に与えられた定めであつたのです。

詩篇 90 篇では、モーセが人の齢が神によって定まっていることを話しています。そしてこう言い

ました。「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。(12 節)」この人生は死ぬためにあると言っても過言ではありません。

また先日、テレビを見ていたら「国際霊柩送還」という業務がこの世にはあることを知りました。国際霊柩送還とは、外国と日本との間で遺体の搬送を行い、遺族のもとに届ける業務です。私は以前、輸入貨物の通関代理業務の仕事をしていたので知っていましたが、ご遺体は貨物扱いになります。飛行機には貨物専用機もありますが、遺体が傷む前に運ばなければいけないので、旅客機にします。しかも、気圧の変化で遺体に損傷がでるのを極力少なくするため、直行便になるように心がけます。その他、もちろん死亡届など膨大な書類の処置も代理業務の一つです。そして防腐処理の他に、生前の状態を思い起こせるようにお化粧することにも命をかけているそうです。

その社長さんの言葉が身に沁みました。その過酷な業務を支える情熱は、「遺族を悲しませないためではなく、きちんと悲しんでもらうため」にあるということです。ここにも、死に対する正しい知識があります。死というものを受け入れることを否定的に捉えるのではなく、むしろ積極的に受け入れるのだ、そのために悲しみを避けるのではなく、むしろ悲しむのだということです。これがこの世に生を受けた人間が知るべき定めであると、私も信じます。

なぜ、いわゆる積極的思考が時にサタンによって吹き込まれたものであると先ほど言いましたが、それはイエス様の言葉にあります。イエス様は地上におられた時に数々の奇蹟を行なわれました。エリシャはまさに後に来られるキリストの型です。人々の病を治され、死者さえも生かされました。風や大波さえも静められた奇蹟も行なわれています。けれども、死を避けることをなさいませんでした。イエス様の場合は、アダムから来る罪によって死なれるのではなく、むしろその罪を代わりに受け入れられる訳ですが、ご自分が「エルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者から多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえなければならぬことを弟子たちに示し始められた。(マタイ 16:21)」とあります。ペテロがいさめました。「そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」イエス様は何と答えられましたか？「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(16:23)」

そして、主は死なれました。そして甦られました。私たちに必要なのは、積極的思考ではなく、復活思考です。積極的思考と復活思考の違いは、前者は否定的なことを否定する思考であることに対して、後者は否定的なことを全面的に受け入れ、それを飲み込んでしまい、なおかつそれらをすべて益とされる神に希望を置くことです。人は死ぬのです。なぜなら、罪をもって生まれ、罪を犯す者は死ぬからです。しかし、その死の中から甦ります。キリストが罪のために死なれ、そしてよみがえられたように、私たちも死にますが、キリストにあつてよみがえります。

2A 従順なしの尊敬

本文に戻りますが、イスラエルの王ヨアシュが、死の病の中にいるエリシャのところに行き、「彼

の上に泣き伏して、『わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。』と叫んだ。」とあります。

ヨアシュという男は偶像礼拝を行なっていました。祖父エフー、父エホアハズと同じく、ヤロブアムの罪から離れませんでした。ベテルとダンにある金の子牛を拝んでいました。彼らは、これがイスラエルの神、ヤハウエに対する礼拝だと言い張りましたが、実際は偶像礼拝でした。けれども、ヨアシュは神の人エリシャを心から尊敬していたのです。エリシャの上で泣き伏しています。そして、「わが父、わが父」と呼んでいます。イスラエルの国があるのは、エリシャの働きがあったからだということを彼はよく知っていました。もし彼がいなかったら、イスラエルは大変なことになっていたことは彼はよく知っていました。

そしてもう一つ、「イスラエルの戦車と騎兵たち」と言っています。イスラエルがアラムを初めとする敵国から守られたのは、エリシャのおかげであることを認め、そして彼が失われることに対する嘆きを言い表しています。エリシャにエリヤから預言の働きが引き渡されてから、数々の戦いにおいて預言や奇蹟を行ない、イスラエルを救ってきました。モアブがイスラエルに反逆した時に、ユダとエドムといっしょにモアブのところに来た時に、水を沙漠の涸れ川に流し彼らの渴きを癒し、それからその水面に朝日を反射させて、モアブの王が同士討ちをしていると勘違いさせました(3章)。アラムの略奪隊がイスラエルに来た時に、どこにやって来るかを逐一、王に前もって教えていました。そのためアラム軍がエリシャの家を取り囲みましたが、彼らを全員盲目にし、サマリヤにまで連れていったのです(6章)。さらに、アラムが全軍やって来てサマリヤを包囲した時に、四人のらい病人を通して彼らが逃げるようにさせ、サマリヤの中でみなが餓死するところから救い出しました。そして自分の祖父エフーに油を注いだのも、彼が訓練を施している預言者のともがらでした。

つまり、ヨアシュは知っていたのです。イスラエルの安全保障は、神に拠り頼むことと決して無関係ではないことを知っていました。イスラエルの軍隊が優れているからではなく、イスラエルの神が預言者エリシャを通して働かれているので守られているのだ、と分かっていました。それにも関わらず、主なる神のみに仕えることができていなかったのです。神またキリストは敬っているけれども、ある意味で信じているけれども、この方に自分を従わせていない、また仕えていないという問題です。

これは、私たち全体に対する神からの呼びかけです。主からの挑戦です。それは、私たちは神の御言葉を通して、またある人々を通して働く御霊の証しによって、確かにこの方は生きているという信頼を持っています。だから、他のある人を通して働かれている神をとて敬っています。けれども、敬っているだけで、自分がこの方に個人的に、実際に、関わっていくことはないのです。この方だけを自分の神とし、イエス・キリストだけを自分の主として、仕えていくことはしていないのです。そして自分自身は？と言いますと、自分のしたいことをしていく、つまり肉に従って生きることはやめません。御霊に導かれて生きる道は選び取っていません。

3A 不徹底な戦い

エリシャは、臨終を迎えるその直前まで、人々に仕える心を忘れていませんでした。イスラエルの力が失われてしまうことを嘆いている若い王ヨアシュに、アラムへの勝利の約束を与えました。まず弓を取らせます。そして彼が弓に手をかけると、自分の手を彼の手の上に載せました。そして、東側の窓から矢を射るようにさせました。サマリヤから東にアラムがあります。これによって、「**主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフエクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。(17 節)**」と言いました。

今度は、矢を地面に打つことを命じました。ところがヨアシュは三度打って、止めてしまいました。そこでエリシャは怒ります。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになる。(19 節)」と答えています。エリシャは、ヨアシュの中にある不徹底さを地面に矢を打たせることによって明らかにしたのです。

1B 勝利の願望

不徹底な勝利というものがあります。いろいろな場面で、完全ではないのに、もう状況がよくなっているから努力する必要はないと思うことはたくさんありますね。例えば風邪を引いてしまいました。酷い症状はなくなり、峠を越えたのですが、それを良いことに無理に体を動かしたりすると、風邪が長引くことがありますね。

私たちには、主から与えられた機会を徹底的に活用して、完全な勝利を得るように呼びかけられています。エリシャがヨアシュに行なったことについて言えば、それは祈りや信仰に当てはめることができます。一つ、矢を射ることは、努力と目標が必要になります。私たちにとってキリストが目標です。次に、矢を射るには預言者の指導と助けが必要でした。私たちの祈りにも、聖書からの教えと助けが必要です。次に、矢を射る時に、その先に何があるか知らされずにヨアシュは射ましたが、私たちも何か行っていることの結果を知らなくても信仰によって行わなければいけません。

そして次が大きな教訓です。矢を射ることは、繰り返し行なわなければ効果がなかったということです。アラムは五度、六度、打たなければいけないのに、それをヨアシュは怠りました。祈るということ、御言葉に従って、また振り頼むことを途中であきらめてしまうのは、祈りや御言葉の力に対する信仰が足りなかった、ということになります。さらに、その時でなければ矢を打つことができませんでした。アフエクでのアラムへの勝利に続いて、連続して戦わなければ完全に勝利を得ることができなかったのです。つまり、その時にしか与えられていない機会というものがあります。

2B 中間の放棄

私たちには、自分の罪の問題、またその他の霊的な問題について勝利を得たいと願います。その願望は確かなのですが、それが改善したように見える兆しがあると、そこであきらめるという怠

慢があります。罪に対する戦いでせっかく力を得たのに、その力をフルで活用しなかったことはないでしょうか？キリスト者としての知識を得るために、聖書の学びや教会での学びをしていたのに、途中であきらめたということはないでしょうか？信仰によって一歩踏み出したのに、先が見えないので途中であきらめたことはないでしょうか？神の御国のために働いていたのに、これもあきらめてしまったことはないでしょうか？自分の肉に対して、また世に対して戦っていたのに、神の武器による攻撃を途中でやめてしまったことはないでしょうか？

エリシャのこれまでの働きを見ていて、私たちに対しても、「五度、六度打つべきだった」という言葉をかけているように思われます。エリシャに与えられていた御霊の賜物は、信じる者に働きます。その信仰の量をどれだけ大きく用意するかが、私たちに与えられた挑戦です。ヘブル書 10 章 23-25 節を読みたいと思います。「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(ヘブル 10:23-25)」